みんなの文芸

引間豐作選　投稿数22句

野仏の頬杖の宙春の雲　三沢　新井　民子

(評)　畦道に始まった草萌を揺らすかのように陽炎が立つ。そんなひなびた径を作者は常の道かあるいは、逍遥の途次か、ふと眼に留めた路傍の小さな石仏。それが面白いことに無表情につく頬杖には、遠い歳月を偲ばせる苔がうっすらと載っていて、しかもその上空には白雲が春風に乗って流れ過ぎる。全くのどかな春の一齣を手際よく切り取って見せてくれている。久恵句、おそらく作者の書斎であろうか、使い勝手の良く慣れたままに乱雑でも気の休まる部屋、少し位の塵など気にならない誰にも手をつけて欲しくない背なのかも。

どこよりも落着く部屋の春の塵　下田野　中田　久恵

ぶらんこに母の膝借る児の笑窪　下日野沢　引間富美子

鉛筆も輕く動いて春浅し　三沢　沢野　恒平

薄絹の波間を滲む春入日　国神　松岡　千恵

友の家あれが目じるし梅の花　皆野　植竹美恵子

末孫も吾を追越し卒業す　皆野　新井　茂

岩壁を水に映して雪柳　下日野沢　田端　マサ

喜寿と言う齢を迎え朝寝人　下田野　根岸　進

昼を告ぐチャイム響きて日脚伸ぶ　三沢　新井　叶子

寄り添える流れの岸の蕗の薹　下日野沢　植木　豊子

引き潮や去年の思ひ出さくら貝　下田野　藤田　稔

暦よりふたあし早い花だより　金崎　伊藤　冠吾

俳句・短歌を募集

作品には、ふりがなをつけ、住所・氏名を明記して企画課へお寄せください。

8日必着

1人1句、1首に限ります。

中田國太郎選　投稿数14首

迷い来てわが家に住み付く雄鳥と日向で語る春の息吹きを　皆野　金子善次郎

(評)　一読して、早春のほのぼのとした雰囲気が漂い、鳥と人間とのメルヘンの世界に誘ういい歌である。どこをどう彷徨い作者の家に辿り着いたのが、猫でも犬でもなく、雄の鶏というのが面白い。その鳥に日向でのんびりと、咲き初めた梅の花とか福寿草とかの「春の息吹き」を語りかけている動物好きの作者の姿が浮かぶ。それは、厳しい生業から離れて憩の一時かもしれない。小動物を愛した一茶の「猫の子のちょいと押さへるおち葉かな」の句を思い出した。山田作、人間の生の証としての短歌の力がにじむ。

病める身は苦しみ多く悲しけれ生きる糧とふ短歌に慰む　金崎　山田　雅子

団塊の世代と呼ばるドア開く春風吹きて吾が身をゆだぬ　三沢　新井　民子

しあわせの渦に巻かれる心地なり曾孫八人すこやかなりて　皆野　新井　愛子

至福なる思ひに縫へる白妙の衣に秘むる縁(えにし)なき吾　皆野　笠原三江子

前山に触れんばかりに現れしヘリ梅咲く里を旋回し去る　三沢　真下　杏子

雪の富士左右に眺め伊豆の旅大景観に墨絵描きたし　皆野　新井　茂

元朝や線香たえぬ三夜寺石段上り親子来るなり　三沢　横田　龍雲

跡継ぎは町に移りて幾十年生家を輝らす日射し変らず　三沢　新井　叶子

ペコちゃんで馴れ親しんだ不二家さん世間と子供甘く見てたね　上日野沢　四方田利男

今宵荘兄弟会のその前に身代わり地蔵揃いて拝す　皆野　塩田　千代

曾孫に飾ってやるよおひな様喜ぶ笑顔楽しみに待つ　皆野　吉岡　ヨシ